# 庭先で育てるおいしい果樹

## vol.28 キンカンを育てよう

近年は香りがよく甘みの強い品種が登場し、皮ごと生食してもおいしいキンカンもあります。ゼリーやジャム、甘露煮、マリネなど、加工すればさらに幅広く利用できるのも長所の一つです。

大森（おおもり） 直樹（なおき）

1958年生まれ。岡山大学自然科学研究科修士課程修了。岡山県赤磐市にて果樹種苗会社を営むかたわら、家庭園芸としての果樹栽培の研究を行っている。


## 開花期に3～4回繰り返して咲くのがキンカンの特性

### 日本への渡来

現在、日本で育てられているキンカン属（*Fortunella*）は、すべて中国南部の原産です。キンカンにはナガキンカン、マルキンカン、ネイハキンカン、チョウジュキンカン、マメキンカンの5種類があり、このうち最も広く栽培されているのが、ネイハキンカンです。ネイハキンカンは中国浙江省地方の原産で、文政11（1828）年に中国浙江省寧波の商船が、船体修理のため静岡県清水港に寄港した際、三保村折戸の名主柴田氏が船員から砂糖漬けにしたキンカンの果実数個をもらい受け、そのタネを播種（はしゅ）栽培したものが最初といわれています。したがって、ネイハキンカンの由来は、中国寧波の地名に基づくといわれています。

### 生育の特徴

キンカンは一般のカンキツ類より遅れて5月上旬に発芽し、葉がつき始めます。春枝の伸長は20日前後で終わり、春枝の長さは10㎝くらいですが、20㎝以上に伸びることもあります。若木では春枝はやや長く、樹齢が進むにつれて枝が短くなります。夏枝は6月中旬ごろから伸長し始め、7～8月ごろまで続きます。夏枝は春枝より長くなり、20㎝以上伸びます。秋枝は9～10月に伸長し、夏枝ほど長くはなりません。

花は当年生長した春枝と前年の夏枝の葉腋（ようえき）に、単生または双生の直花をつけるほか、当年発生した夏枝の頂端にも着生することがあります。開花期は、春（5月ごろ）、夏（6月末～8月ごろ）、秋（10月ごろ）の3期で、春、秋の開花は少なく、夏の花が一番多く結実します。夏の花は4～5日で終わり、約10日後に再び開花し始めます。このような開花の仕方を8月中旬ごろまで1開花期に3～4回繰り返します。この性質が、ほかのカンキツ類とは異なっているところです。

受粉は虫媒による自然受粉で行われますが、自家受粉するので授粉樹は不要です。開花を3～4回繰り返すため、果実の大小は一番早く咲く1番花の果実が最も大きく、次いで2番花の果実となります。3～4番花は12月ごろまで緑色が残る未熟果のままで、果実が小さいので収穫はしません。

また、キンカンの開花は梅雨末期から梅雨明け後の高温期になるので、気温が異常に高いと結実不良となります。

### 利用法

キンカンの果実は、生食（皮ごと食べる）のほか、シロップ漬け、マーマレード、砂糖煮、果実酒、かぜ予防薬などとして広く利用されています。

### キンカンのおすすめ品種

**「スイートシュガー」**

やや面長の果実で、甘みが強く香りもよい。樹高80～120㎝と小型で、鉢植え栽培にも向いている。1本で結実する。

**「明和きんかん」**

大粒の果実が特徴的で、甘みも香りもよく品質がよい。「ネイハキンカン、ニンポウキンカン」の別名をもつ。1本で結実する。

**タネなしきんかん「ぷちまる」**

皮に苦みがないため、皮ごと生で食べてもおいしい。タネがほとんど入らないので食べやすいのも長所。1本で結実する。




本記事で掲載の一部品種はp.58で販売。

# 幼木期に主枝を充実させ樹形の骨格をしっかりつくる

## 栽培の適地

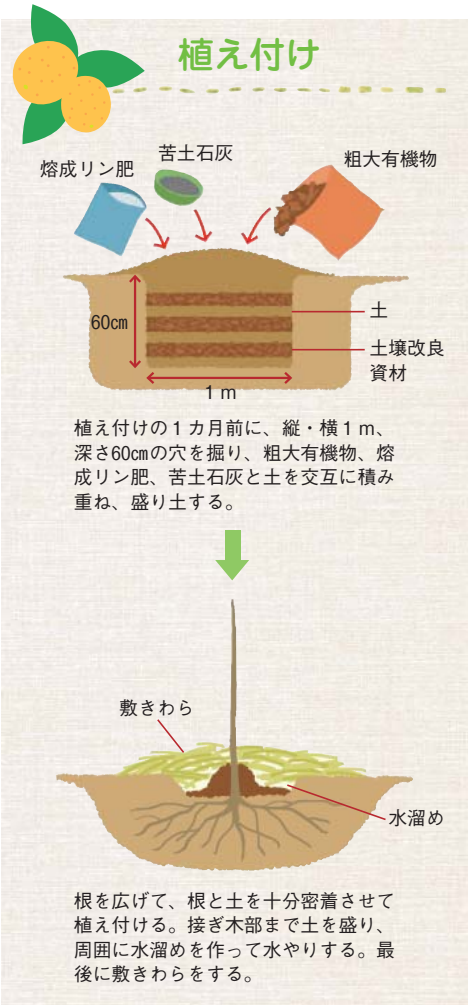
キンカンはカンキツ栽培地帯ではどこでも散在していますが、ほかのカンキツよりやや土壌水分の多い土地に適しています。また産地の気温はキンカンの方が温州ミカンよりもやや高く、降水量が多めの気候を好みます。また、キンカンは普通の土壌であればどこでも栽培できますが、水はけのよい土壌が、着色がよく食味もよくなります。

## 植え付け

植え穴は、少なくとも植え付けの1カ月前には準備します。まず縦、横1m、深さ60cmの穴を掘り、これに粗大有機物、熔成リン肥、苦土石灰などを土と交互に積み重ね、盛り土します。複数本植える場合は、樹間を3×3mとります。植え付けの要領はミカンと同様に、苗木の根を十分に広げて細かい土を根元に詰め、根と土を十分密着させるようにします。接ぎ木部まで土を盛り、根元の周りには浅い水溜めを作って水やりします。その上に敷きわらや敷き草をして乾燥を防ぎます。

## 1年目の管理

春に植え付けた苗木は、6月ごろから発芽し始めますが、このころ、薄い液肥を施肥と水やりを兼ねて施し、活着を促します。6月以降に発生する新葉、新梢に対しては、必ずミカンハモグリガの防除を行い、枝をできるだけ伸長させるようにします。また、キンカンの苗木はほかのカンキツ類の苗木より小さいため草の勢いに負けやすいので、除草をしっかりと行いましょう。




## 幼木期の管理

幼木期は樹形の骨格をつくることに重点を置きます。主幹から出る数本の主枝候補枝は、2～3年生樹では結実させずにおいて枝の伸長を図り、樹冠拡大を目指します。幹が肥大するとホシカミキリなどの枝幹害虫の害にあいやすいので、特に注意しましょう。

キンカンの枝梢は細く密生するので、放任すると、枝はほうき状に密生した樹形となります。これまで円型に仕立てるのが一般的とされてきましたが、近年は良果生産を目的に開心自然形に近い樹形に仕立て、樹冠内に日光を十分入れるのが主流になってきました。

苗木から仕立てる場合は、開心自然形仕立て同様、主幹から出る2～3本の枝を主枝として利用します。ただし、枝が細いので亜主枝はとりません。幼木時の剪定の要点は主枝を早くつくることにあるので、主枝候補枝の先端を軽く切り返すほか、不要な枝だけを間引き、葉をなるべく多く残すようにします。

## 年間の管理

### ●水やりと土壌管理

水やりは、開花期から幼果期にかけて高温乾燥が続いた場合、すぐに行うようにします。また、土壌の表面は敷き草、草生により土壌の流亡を防ぎ、有機物の補給を図ることも重要です。冬～春先にかけては、タコつぼ深耕を行い、根群の発達を図ります。

### ●施肥

肥料不足では新梢の伸び、果実の肥大も悪く、時には果実に苦みが強く感じられます。また、チッソ成分の遅効きは着色を遅らせ、食味を淡白にしがちなので与えすぎも禁物です。施肥量はおおむね温州ミカンの基準の半量で、施肥割合は、結実を始めたら春肥、夏肥だけにとどめ、着色促進のためチッソ成分の遅効きを避けるようにします。

### ●収穫量をアップさせるポイント

①1～2番花の結実を促します。そのためにはまず、結果枝（春枝）を少なくとも10cm以上に伸ばすことが大切です。また、開花中に高温乾燥が続くと受精が悪く幼果の発育も止まり、落花（果）が起こりやすいので、敷き草、水やりなどを行い、乾燥を防ぎます。

②初霜の時期は産地によって違いますが、キンカンの産地では割合遅く、11月末～12月初旬になります。果実が霜にあうと果面が変質し、かつ収穫量も少なくなります。稲わら、こも、保温布などで株元や樹冠を覆い、防霜に努めます。

### ●結実

キンカンの花は主に春枝の葉腋に着生しますが、それが受精せずに落花すると、再び同じ位置に花が着生することが頻繁にあるので、できるだけ早い花を確実に結実させることが大切です。自家受粉するため授粉樹は必要としませんが、ハナアブ類、ミツバチなどの虫媒受粉をさせるか、毛ばたきによる人工授粉を行えば、受精後の果実の発育は活発で、落弁後2週間くらいで果径は1cm近くにもなります。

### ●結果（摘果）

摘果の対象となる果実は、開花期が7月下旬以降のものですが、生理落果は8月末までにほぼ終わるので、遅くとも9月末までには摘果を終わらせます。長さ10～15cmの枝に2～3個を目安に果実をつけ、ほかは摘果します。

### ●収穫

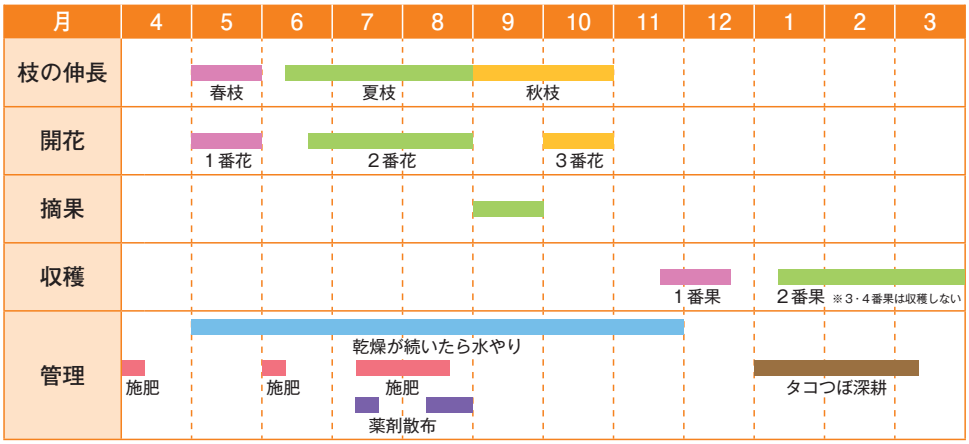
開花後、約150日で成熟期となります。果皮も可食部になるため、果皮に甘みが十分にのることが大切です。果実の色は、10月下旬ごろから緑色があせ始め、黄色から黄橙色と変わる11月末ごろから収穫期となります。もちろん、これには栽培地の気温が関係するので、自身の目で見て判断しましょう。

一般には、収穫後に貯蔵する場合はポリエチレン袋に0・5kg程度ずつ入れて、冷暗所で貯蔵すれば果皮の萎凋（いちょう）も少なく、1カ月くらいは保存ができます。

### ●整枝・剪定

成木の剪定は、枝が密生し樹冠内部にまで光が透過しないことが原因による、枯れ枝の発生を防ぐために、太い側枝の間引きを中心に行います。また、枯れ枝がある場合は、枯れ枝の剪定も必ず行います。樹齢が進み、枝の伸長が緩慢となるにつれ、短い結果枝（10cm以下）が多くなるので、枝先から20～30cmで切り返す剪定を行います。この場合、樹冠全体を一度に剪定せず、2～3年にわたって分けて行うようにし、枝剪定による樹勢の低下を防ぐことにも注意します。

### ●病害虫、生理障害の対策

キンカンは細い枝が密生して枯れ枝ができやすく、これが黒点病の病巣となって、果実の表面に黒点が発生する原因となります。枯れ枝の除去を十分行い、落花期（7月中旬ごろ）と8月中下旬の2回に分けて、薬剤散布をします。ミカンハダニ、ヤノネカイガラムシ、ツノロウムシなどの防除はほかのカンキツ類の防除法に準じて行うようにします。

### ●成木の生育と作業暦